

結局優勝はできなかったけど、やりきつとくのは大
事だなって思った。悔しかったけど、あれ以上はな
かったと思う

語り手 浦野裕貴（高校四期生 食品メーカー）
聞き手 中田裕衣可

*

高校生時代の部活動

―これが、例の。（担任の田中海登先生の写真を見せる。）

懐かしい顔がいるわ。

―昔と変わらずですか、田中先生は。

うん。全然変わってないな。ちよつとおじさんにはなってるけど全然

変わってない感じするわ。

―部活で（田中先生と浦野さんが）部長、副部長やって、ペアも組んで
いたと（田中）先生に聞いて。

そうやねん。高三のときはずっと海登とペアやった。最後の大会まで
二人で組んでて。

―二人で組んでて優勝とかしたこともあるんですか。

優勝はないな。全然。あんまり強くなかったから。

―部活のエピソードで、「規律を守る大切さ」を（事前アンケートで）
書かれていたと思うんですけど、それが例えばどんなときに今に生きて
ると感じますか。

その書いた内容と少し違ってしまいかもしれないけど、組織・チーム

の中で、自分がどういう役割があるか、何をすれば一番チームにとって
いいかみたいなのを、学生生活もそうやけど、主に部活ですごく勉強さ
せてもらったなっていうのは、一番感じてる所かな。

―テニスは団体戦とかもあるんですね。

そうやな。団体戦で最後の夏かなんかが滋賀ベスト四か三位かどっ
ちかやって。海登と俺はあんまり勝ってないけど、そういう結果になっ
て、団体として。先生からは、日頃の練習とかから、声を出したり、一
生懸命「自分たちが目指す」みたいなところを巻き込んでちゃん
とやってたから、勝ち負けとしては勝てなかったかもしれないけど、チ
ームに対してはいい影響を与えられてたんじゃないか、みたいな話を
いただいたときに、組織の中で、どう動けばいいかみたいなのを無意識に
考えてたのかなっていうのを、後から気づいたって感じです。

―今日学校に来て、当時と変わったなっていうこととか、懐かしいなっ
てことありましたか。（インタビューの前に校内を見て回った）

テニスコート印象的やったな。めっちゃ真剣にやってたからさ。朝
練して、授業寝て、部活するみたいな感じやったから。めっちゃ懐かし
いな。土日も練習あったから、友達と出かけるみたいな記憶、全然な
い。さっき（インタビュー前）も、セブレでリプトンの紅茶買った
みたいな言ってたけど、練習して、昼飯みんなで食べて、疲れたなっ
て言ってマクド行って食べて、帰って晩御飯食べて寝るみたいな記憶し
かない。

―部活で辛かった時期もあったんですか。

三年生でいうと、俺は絶対に近畿大会ないしはインハイに出たいっ
てずっと思ってたから、それ目掛けてやってるけど、十何人もいたから
やる気ある人もいれない人もいるし、めっちゃバラバラ感というかチ

ームスポーツではないにしても、練習の雰囲気とか大事だと思っから、その意識差とかギャップみたいなのは結構大変やったんってのは思う。海登もそんな怒鳴るタイプじゃないからさ、俺がどっちかっていうとそっち側やった。めっちゃ怒ってたと思う。海登にも怒ってた。「お前ちゃんとかやれよ！」って言ってたと思うし、海登は海登で横江川先生（テニス部の当時の顧問）への報告とか、部長としてめっちゃめっちゃ頑張ってたんやなっていうのを、後から気づくけどさ。

ーでも、それだけ本気で。

うん、めっちゃ本気やった。改めて思ったけど、めっちゃ本気やった。その本気が故のギャップ感はあったかな。結局、優勝はできなかったけど、やりきったくのは大事だなんて思った。悔しかったけど、あれ以上はなかったと思う。

*

高校生時代の価値観

ー（事前アンケートの）今につながるエピソードの部分で、高校で色んな価値観を得られたって書かれてたと思うんですけど、異動になって（現在は東京在住）価値観の違いは感じましたか。

そうやな、感じた。ものすごく感じた。でもその感じ方は、高校とか大学でいろんな人に出会って、価値観が当然たくさんあるよねとか、地域によるものもたくさんあるし、お家柄というか、どんなバックボーンがあるかによつて全然違うと思うんやけど、それを衝撃的に学んだのは高校のときやった。

ーどういうことをきっかけに高校で学んだんですか。

田舎の公立中学校行つて、なんか普通の人多いっていうか。なんで普通の人が多いかっていうと、多分、同じ地域にいて、同じバックボーン

ンというか、同じような環境で育ってきたからこそ、当然キャラクターはあるけど、同じような人が多いみたいなのはあると思うんや。立命館入って、本当にいろんなお家柄の人がいて、接する人の幅が増えた感じはすごくしたし、戸惑いみたいなのも高校のときはあった気がする。ていうのが、それ（事前アンケート）に書いたやつかな。あとは、公立の中学校から高校に上がって立守に入って、京都の人もいれば、奈良の人もいて、大阪から来てるやつもおるし、俺みたいに滋賀から通ってるやつもいるしみたいな感じで、面白い人にたくさん出会えて、最初はうまくコミュニケーションが取れてない瞬間があったかもしれないけど、仲良くなつてついでなので、すごくいろんな価値観に出会ってたんだなっていうのは後になって感じたつてところですよ。

ー部活を除くとしたら、高校で何が一番思い出に残ってますか。

海外研修もあれよかったな。俺カナダやつてんけど。

ーカナダでのテーマとか、プログラムのなものはなんだったんですか。

カナダ行つて、その中でクラス分けされて、学校で授業受けるみたいな感じのプログラムやったから、ちよつと何勉強したか覚えてない。ホームステイは全員マストで、二週間ぐらい行つたと思うんけど。着いて、あなたの家族はこの方々ですみたいな感じになって、そのカナダの人夫婦やつてんけど、二週間過ごすわけやな。すごい経験やつたなって思った。当たり前っていったらすごく失礼やけど、いい家庭もあれば、その人とはちよつと合わないかも、みたいな人たちもいたりして。そういうの含めて、やつばすごい経験やなって思ったな。学校で授業受ける日もあれば、ナイアガラ行くみたいな日もあったりして。ホッケーやる日があったりとか。遊んだことはめっちゃ覚えてるけど、授業は覚えてないなあんまり。でも、友達と遊びたいからさ、ホームステイのパパとマ

マに「こいつと遊びたいから、その親（友達のアナタのファミリー）と連絡取ってくれ」とか言ってる。もしかしたら出かけてるかもしれないから。それで来てもらって遊ぶとか。そのときの彼女とかもさ、会いたいやん。「俺はガールフレンドに会いたいんだ」とか言っていました。

—すごく楽しそう。

そう。さっきの価値観の話もそうやけど、いろんな人と接してたっていう、質というよりは量みたいなところは、立守ならではかな。

*

授業と進路選択

—授業とかで印象に残ってることはありますか。

理系やと卒業研究みたいなのがあって、三人チームぐらいで、俺らはクマムシっていう生物の研究をした。あいつってなんか仮死状態になれるんやけど、仮死状態に安定的にさせられる条件は何かみたいなのを研究してたな。

—クマムシって、めっちゃちっちゃいやつですか。

—そうそう、立守中のコケをとってきて探して。

—え、コケにいるんですかあれ。

いろんなところにいねんて。そのコケとかを水に入れて、探して、スポイトで取るみたいな。それも結局、こうやった方がいいよとか言われるんじゃないかって、自分たちでどういう風に見つけるのが一番効率的かみたいなのも、話し合いながらやってたかな。だから、一見お遊びっちゃ遊びかもしれないけど、でもいろんなことやらせてもらえるっていう点では、立守らしいかな。基本的に生物は子供のときから好きやったけど、そういうのもあって、生物は楽しんかかって思ったのはあるかな。

—生物が好きだったら、文理選択とかは絶対理系みたいな感じだったんですか。

いや、ちゃうねん。そのときはただのテニス頑張ってるチャラチャラしてるやつみたいな。ほんまに適当に生きてたから、あんまり考えてなくて。考えてないからこそ、理系って大変そうやから文系に行こうかなって思ってたんや。頭がいい子がクラスにいて、文理選択の話になったときに、「文系やと、例えば営業職とか事務系の仕事とかしか道は開けていけへんけど、理系やったら研究系もいけるよね」みたいなんを言ってる、「まじそれやん！」ってなってる理系に行った。めっちゃ覚えてるわ。椅子座って教室で喋ってる。ほんまにこんな感じで喋ってる、「それや！ 確かに！」とか思ってる。その言葉を思い出して大学院まで行ったらわけではないけど、よく雷落ちた的な話って言うやん。文理選択のときは間違いなく（雷が）落ちてたと思うあは。

*

大学・大学院生時代の研究

—今のお仕事が食品系っていう風にお伺いしていたんですけど、私も興味があって。立守の高校時代から、どういう経緯で今の食品系を目指されて就かれたんですか。

高校のときは特に中田さんみたいに、食品に興味あるみたいなのはあんまりなくて、友達と遊ぶのに精一杯やったって部分もあるんやけど。大学は生命科学部生物工学科に進学して。大学のときもあんまり就職先とか深くは考えてなかった。なんで考えてなかったかっていうと、大学院に行こうかなと思ってたから。

—生命科学部はなんで入られたんですか。

—生命科学部に入ったってよりかは、生物系が好きやなっていうのは、

授業を受けて思ってたし、数学とかはほんまにちょっと無理やな思ってた。で、好きな教科何かってあげていたら、生物、化学この二つかなって感じだったから、これに関わる場所に行って勉強してみたいなって思ったのが、進学の学部を選んだ理由です。

—大学院にはなんで入ろうと思ったんですか。

就職の選択肢の幅を増やしたかったっていうのと、なかなか研究とかやれる機会もないから、一回やってみようっていうチャレンジの部分と。将来を見据えてっていうのが大きな理由かな。研究が好きだからっていうよりかは、人生としての機会を獲得したいなって思ったのがメインの理由。

—大学院でも生物の研究をしてたんですか。

そう、学部の四回生から研究室に入るんやけど、大学院では、生物系の研究、主に植物の機能解明みたいなのをやっていて。遺伝子組み替えを試してみたり、いろんな生物的な手法を使って調査を試みたりっていうのを、ユケを使いながら研究してたかな。

—面白そう。すごく。

そう。めっちゃ面白かったし、漠然と描いてたやりたいことみたいなのは少し触れられたかなっていうのが。

—なんで植物系を選んだんですか。

大学の授業を受けて植物系が一番面白かったっていうのもあるし、酵母とか目に見えへんものよりかは面白かったな。植物みたいになんと形に現れるのとかは、すごく自分の興味に合ってるんだろうなって授業を受けて思ったって感じ。

—そこからなんで食品系に行こうと思われたんですか。

生物の話でいくと、学問としてはすごく楽しかった。機能がわかっ

てないものを突き止めていくみたいなのって、めっちゃめっちゃ興味深かったし、自分がやってみたかなと思っただけができた瞬間だった。ただ、職業としてそれをやっていくかっていうのを考えたときに……。やってた研究がどっちかというと基礎研究で、わからないものをわかるようにするみたいな。わかりやすく言うと、「この物質は睡眠を改善する可能性があります」みたいな研究って、どっちかというと応用で。基礎研究と応用があって、自分がやってたのは基礎研究。基礎研究って、探求って意味ではすごく楽しかったけど、人に対して役立ってるっていうのを少し感じにくくなっていうのを思っていて。職業にするんやったら、

「自分がやったことで人の役に立っているな」とか、「誰かのためになっているな」っていう実感があつた方が、やりがいがありそうっていう風に思ってた。職探し始めて。まあすごく安直かもしれんけど、食品とか結構身近やし、食に関わらない人はいないんで、その価値を提供できる絶対数として多いのは、食品かなと思って、食品を目指すようになったって感じですかね。

*

卒業後／今の仕事と経歴

会社入って最初、札幌支店配属。札幌にいました。キューピー家庭用札幌支店配属で、家庭用営業っていう、本当にスーパーマーケットとかに並んでる商品を販売する営業としてやりました。だから、質問に書いてくれた「希望配属ですか。」っていうのというと、全く希望なく、「浦野くんは札幌に行ってしっかり勉強してください。」みたいな感じで、最初は北海道にいました。で、三年ぐらい営業やって異動があつて、東京に帰ってきた。東京に帰ってきたのは、営業じゃなくて「経理」として勉強してね。」っていう感じで。営業三年ぐらいやって、経理三

年ぐらいやって、今は新規事業チームみたいなところでいて。

―元々は関西らへんで働けたらって感じだったんですか。

全然そこはあんまりなにも思ってたなくて。全国転勤の方がおもしろうやなって。

―珍しくないですか。私の周りでは転勤とかしたくないって聞きます。

そうそうそう、でも、自分にも子供ができてとかやったら少し考え方は違うかもしれないけど、転勤とか、地方とかに行ったら一皮剥けるんじゃないかって思ってた部分もあったかな。

―なるほど。メールのアカウントにカフェって書いてあって、新規事業ではカフェか何かやってらっしゃるんですか。

あ、そうそうそう。今の部署で、公募、「こういう事業をやりたいんですけど、やりたい人いませんか。」みたいな人が、会社として通達があつて。それで立候補して、今のその新規事業をさせてもらえることになりました。

―なにかその事業でコンセプトとかはあるんですか。

コンセプトはカフェで儲けていこうみたいな感じではなくて。今つてスマホ一つで食品が買えたりとか、食品に限らず洋服とかなんでもネットで買うみたいな形になってきて。それってデジタルとしてすごくいいことの反面、我々メーカーとしては、お客さんとの接点は減っている。お客さんとの接点も減るし、ライフスタイルみたいなものもすごく多様化しているから、実際にお客さんとお会いできる場所とか、一般のお客様の考え方とか、トレンド感みたいなのを理解できる場所があった方が、会社としていいんじゃないかっていう仮説のもと、今そのカフェみたいなのをやっているというのがコンセプトというか目的。

―実際にカフェやってて、そういう場所になっていると感じますか。

感じる。めっちゃ感じる。お話の中で、こういうのが求められてる

かもつていうのを感じるときもあるし。例えば、今うちのお店で働いてくれるメンバーと面談じゃないけど、普通に立ち話して、「最近お客さんに聞かれることとかない？」みたいな。例えば、『海外のお客さんは結構スムーズにありますが。』って、聞いてくれるお客さん多いですね。」って話があつて、「じゃあスムーズに出してみようか。」みたいな感じで。直接こんな商品が欲しいとか聞いたわけじゃないけど、よく聞かれる質問とかをスタッフのみんなと喋って、会話の中でちよつときつかけを見つけて発売してみて、実際にお客さんの声から、アイデアが出てきて、最終メニュー化していくみたいなのはやってるかな。

―札幌で営業して、東京で経理をして、今、新規事業をしてらっしゃると思うんですけど、どれが一番自分にとっていいなっているのはありますか。

経験と楽しさ両方の軸でみて、楽しさでいくと、これはちよつと性格的なやつかもしれないけど、割とこれがやりたいみたいなんなくて、なんでもそれなりにその性質に合わせて楽しさみたいなのは見出せる方やと自分では思ってるから、どれも楽しかった。カレーとお寿司と焼肉みたいな感じで、全然種類違うけど、全部おいしいみたいなイメージで、どれもやっぱ良かったな。楽しかった。で、関わる人も、例えば営業やつたら、社内もそうやし、得意先もそうやし、スーパーのおばちゃんとかスーパーの店長さんとか、お客さんとか、結構幅広く。経理は、各社の社長と数字の詰めをやったりとか、どっちかという会社の内側とか経営に近い人と一緒に仕事をさせていたっていう機会が多かったし、新規事業は自分で色々やるっていうのとか、逆に自分がアルバイトを採用するのとかもやってるから、関わる人がそれぞれ全然違うし、や

ってる内容もそれぞれ違ったから、どれも楽しかったなつてのが印象的。経験的にいうと、営業は社会人としてのマナーというか立ち振る舞いみたいなのは、すごく厳しく教えてもらったのはあるし、経理は企業、利益団体っていう感じで、基本にお金から離れることは絶対にないと思うねん。会社の数字とかを管理する部署にいと、その全体像がわかるし、どういうお金の動き、どういうものの動き、どういう人の動きしてるかっていうのはものすごく勉強になった。だから社会人として必要なスキルは営業でも学んだし、それはどっちかというと対外的なもので。経理やったら、その経営目線のところを勉強させていただいたし。次の新規事業は、例えば自分で仕入れ先を決めたりとかするの、それは営業の経験が生きるし、会社に予算を承認してもらうのとか、数字の管理も全部（自分が）やってるから、それはすごい経理部時代の経験が生きてる。だから経験的にもそれぞれの良さがあってどれも良かった。

―仕事をしていた苦勞するのはどんなことですか。

今はカフェとか商品開発みたいなのをやってて、前は営業やってて、一貫して思うことは、食品以外だと便利か便利じゃないかとか、数字として表せられるものって世の中たくさんあると思うねんけど、おいしさって数字としてやっぱ表しにくいものもあると思うし。俺がめっちゃおいしいと思って中田さんに勧めても、「なんか浦野さん言ってるけど、まあまあこんなもんか。」みたいになつて。逆もしかり、あると思う。食品メーカーとして働いてて、うちの商品を売り出すときもそうやし。カフェでメニュー開発したりとか、ちよつとした商品を出そうとしたときに、俺がおいしいと思つても多くの人には届けられないかもしれないし、それが果たして求められているのかつていうのは、数字じゃ測れへ

んものやからこそ、すごく苦勞する瞬間は多い。ただ同時に、すごくやりがいを感じる瞬間でもある。自分が提供したものとか、自分が作った商品を買っていただいたりとか、おいしいつて言ってもらえる瞬間。商品を買つてた営業のときも、「あの提案してくれた商品売れてるね」つて言われたら、売れてるつてことはお客さんが何回か買つてくださつてることやと思うし。

―じゃあそこは、達成感、楽しさもあるような感じですか。

そうやな。やっぱこの世の全員が好きなものつてないと思うから。そこはめっちゃめっちゃ達成感のあるポイントなんじゃないかなつて思いながら働いてます。

（次ページへ）



左：語り手 浦野裕貴さん

右：聞き手 中田裕衣可

【感想】

高校最後の大会で学んだ「やり切ることの大切さ」に強く共感しました。やり切ることで次に進めること、そしてその経験を積み重ねることが、将来の仕事においても難しいことに挑戦し続けられる姿勢につながり、また、やりがいも得られるのだと感じました。私も、部活動に限らず、挑戦し、やり切ることで、自分がしたいことにやりがいを得られるような人生にしたいです。